詩編第１編からの黙想

主の教えを喜び、想う

松見　俊

詩編第１編は詩編全体篇の「序文」のようなものです。第１編は、詩編全体の雰囲気を伝えているというより、むしろ「箴言」に近いものですが、それでも詩編全体の信仰の良い序文になっています。詩編ほど人生の格闘、神への叫びを赤裸々に描いている書物は珍しい、そこに心惹かれます。

１．「幸い」

詩編の最初の言葉は、「幸い」です。主イエスの山上の説教も「さいわいだ、心の貧しいものたちは」で始まっています。私たちの人生には悩み、苦しみ、悲しみがありますが、そのただ中で「幸いである」という宣言が響いています。この「幸い」＝「祝福」（blessed）と似ている言葉に、「幸運」（ラッキー）、「幸福」（ハッピー）があります。「祝福されている」ということは、私たちと神様とのまっすぐな関係、神が私たちを「喜んで下さっていること」を意味します。人間的な「幸運」とか「幸福」とかを超えて、神が私たちを覚え、喜んでくださっているのです。

２．祝福された人とは「神に逆らう者の計らいに従って歩まず/罪ある者の道にとどまらず/傲慢な者と共に座らぬ」人です（１節）。「はかりごとは未だ心だけの問題であるが、これに耳を傾け、歩んでいると実行の道に立ち、遂に最悪の群れの中に仲間として座することとなる」。「歩む」「とどまる」「座る」と、悪との関係の仕方が段々、深みにはまる様子を表現しています。

３．２節は「幸いな人」を積極的に表現します。それは「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」です。「教え」とはモーセ五書のこと。この「教え」はイエス・キリストにおいて肉体を取られたのです。私たちには、人生の土台、目的が与えられています。教えの成就としてのイエス・キリストの生き方、言葉が重要です。

４．「主の教えを愛し、昼も夜もそのおきてを口ずさむ」という表現の中で、「愛する」は「よろこび」とも翻訳可能です。私たちは一体、誰に身を寄せ、誰の言葉に喜んで聴くでしょうか。「共に生きるもの（お方）」を持つことは幸いなことです。口語訳では「思う」と翻訳された言葉は「ぶつぶつつぶやく」、そこから哀調を帯びた鳩の泣き声に応用されて、「嘆いたり、ため息をついたりすること」を意味しています。ラテン語訳はこれを「黙想する」と翻訳しています。思い巡らせることです。

５．神から恵まれたものは、水のほとりに植えられた木のように、時が来ると実を結びます。しかし、悪しき者は風に飛ばされる「もみ殻」のようであるといいます。雨の少ない砂漠地帯では、水は必要不可欠。いのちの源である神、あるいは神の言葉に根を伸ばし、根を降ろして生きることこそ幸せです。

６．６節「主は神に従う正しい者の道を知られる。」部分的に正しいとか、ほんの少し悪であるとかは問題になりません。自分に拠って立ち、自分で何とかしようとすることこそが問題なのです。私たちが主なる神を知るのではなく、私たちは、主なる神に「知られている」のです。ここに絶対的平安があります。ヘブライ語の「知る」「知られる」は単なる知識のことではなく、深い人格的交わりであり、神が私たちと一体となり、私たちのことをあたかもご自分のことのようにして愛して下さるのです。私たちは自分の思いが認められないことを嘆き、悲しみます。しかし、神に知っていただいていることを喜びましょう！悪しき者の功績・実績は世の中で認められ、賞賛されているかもしれませんが、「永遠の相」からすれば、たいしたことではありません。神に知られ、覚えられていることを喜びましょう。